

寺田寅彦逝去時の勲章申請資料の紹介

四宮義正

インターネットによる過去の資料閲覧サービスは各種あるが、国立公文書館デジタルアーカイブに、寺田寅彦が逝去した時の勲章申請資料があった。寅彦の業績がまとめられていて、当時の評価が窺えるので紹介する。

書類名は「故東京帝国大学教授寺田寅彦勲章加授ノ件」である。内容としては、申請書類本体、論文目録、履歴書となっている。

この書類でみると、当時の叙勲申請の流れは、第一段として文部大臣（文部省）から内閣総理大臣、第二段として内閣総理大臣、賞勲局総裁から天皇（宮内省）である。第二段の業績記載は第一段のものを要約しているのので、第一段の文部省作成の資料を紹介する。原文縦書きであるが横書きとして、読みやすいように、旧漢字は新漢字、カタカナはひらがな、旧かなづかいは新かなづかいとし、濁点、句読点、一部漢字にルビを追加した。

故東京帝国大学教授正三位勲二等寺田寅彦

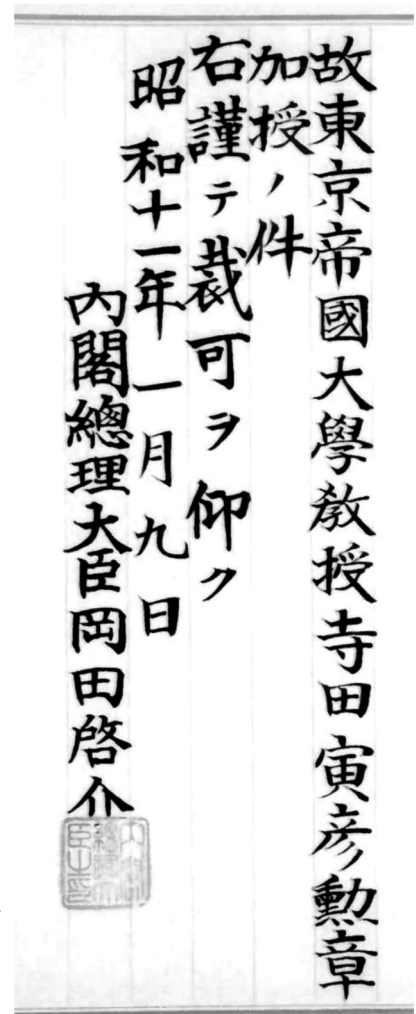
授旭日重光章

右は明治三十六年東京帝国大学理科大学実験物理学科を卒業し、翌三十七年理科大学講師を嘱託せられ、全四十二年助教授。大正五年東京帝国大学理科大学教授に任ぜられ今日に至る。

其の間、勤続すること三十二年に及び、學術の研究と後進の指導とに尽瘁したる功績は実に測るべからざるものあり。

全人は地球物理学に関する研究極めて多く、之を枚挙するに違あらざるも、茲に其の代表的のものを挙げれば、一は精密測量に據る地殻変動の研究なりとす。之地震現象の研究に全く新しき分野を開拓したるものにして、地震国日本の斯学をして、世界に於ける尖端に立たしめ、震災予防の研究にも一地歩を進め得たるものと謂うべし。又湖水湾等の水の振動に関する研究をなし、其の結果は津浪の災害防止に関する考究をなす場合の有力なる資料として、現在尚、重要視せられつつあり。

次に全人は航空学界に寄与したる功績極めて大なるものあり。即ち、大正六年以来航空学調査委員、航空研究所員、更に航空評議会臨時評議員として航空物理学に関する多数の重要な研究を公にしたり。就中、大正十一年以来帝国海軍より航空船に関する調査を嘱託せられ、当時問題となれる航空船爆破の原因を探求し、其の原因が航空船の気囊を造る銀色球皮中に無線電信の発



上奏文表紙

信によりて発生する火花により、气囊より漏洩する水素瓦斯に点火するにあることを確めたり。この結果は帝国海軍の容認する所となり、航空船の建造に際して、銀色球皮を用ひざることとなりたるものにして、之等の原因より招来すべき幾多の惨害より免がるるに至らしめたり。又流体の渦流運動に関する研究は航空力学理論の世界最大権威ヂ・アイ・テラーに対立する重要な業績にして、航空理論の発達に貢献したる処 尠からず。

全人は物理学上に寄与したる功績、亦著大なるものあり。其の「X線による結晶体の構造の研究」に対し、大正六年学士院賞を授与せられたるに 徴しても 明なる処にして、大正十三年理化学研究所研究員を委嘱せられ、寺田研究室を創設して幾多の独創的研究を遂げたり。之が物理学的研究方法を漁労方法、水産物の製造加工方法、水産養殖の研究、海洋漁場漁況の研究等に初めて導入し、明治四十四年以来水産講習所にも関係して、水産業今日の盛況をみるに至る基礎を築きたり。又全人の火災に関する研究に於ては、燃焼中に火事の拡がる機巧、特に 焰を出す場合、出さざる場合、或は燃焼物の性質により、拡大様式に差別あること等を現象的に研究したるものにして、各方面に注意を喚起し、亦消防技術の改革に資する所 尠からず。

尚、全人は大正九年学術研究会議員被仰付、大正十四年帝国学士院会員に推薦せられ、名実共に学界の指導的位置に立ち、地震研究所の創立に際しては、末広恭二博士を援けて創設に尽瘁し、創立後は地震研究所員に補せらるると共に、震災予防評議会評議員として斯界の発達に寄与する所あり。農事試験場嘱託としては、気象と農作物との関係に対し、個々の現象に就て研究をなして農事気象の根本的取扱法を樹立する等、農産技術上重要な寄与をなし、其の他、数多公私の委員会、研究団体等に関係し、之等の機関を通して国家社会を裨益したること甚大なり。

以上の如く全人は物理学の所有部門に亘りて、学殖極めて該博にして、多数後進を掖導し、其の研究発表は斯界に貢献したる所 尠からず。其の応用的方面に於ては、社会を裨益したる功績 洵に偉大なるを認む。然るに客月三十一日、病を以て遂に薨去したり。庶幾くは右不朽の功績を録せられ、特に生前に 遡り頭書の通、叙勲の栄を与えられんことを茲に 謹て奏す。

昭和十一年一月七日

文部大臣 松田源治

〈語句〉

嘱託：審議会や調査会などの委員に、民間人やその行政機関に属さない公務員を任じること。また任じられた人。

全：同

尽瘁：一所懸命に力を尽くして労苦すること。

斯学：この学問。

就中：特に。

航空船：海軍では飛行船のことを陸軍と区別して航空船と呼称した。

气囊：気球や飛行船のガスを入れておく袋。

ヂ・アイ・テラー：G.I.Taylor (1886～1975)

イギリス人。流体力学の世界的大権威者。乱流や渦流の研究で著名。

徴しても：考えあわせても。

いしよく
委嘱：仕事などを外の人にゆだね頼むこと。

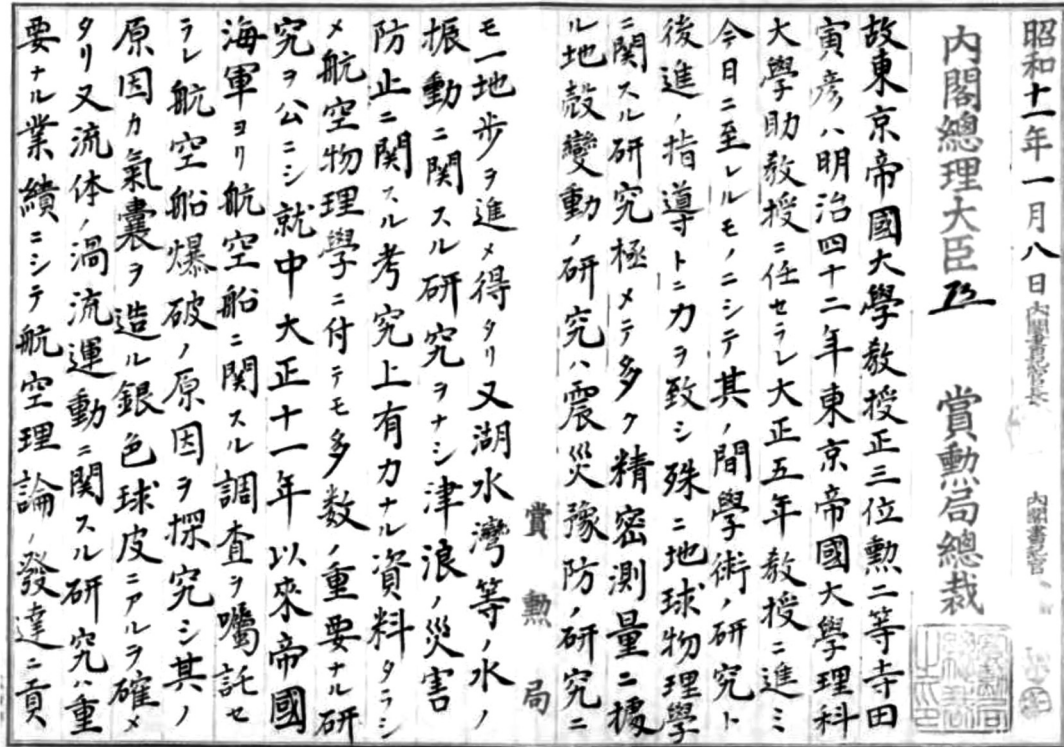
ふ
補せらるる：職に任ぜられる。

ひえき
裨益：役に立つこと。

えきどう
掖導：人をよい方へ導く。

かくげつ
客月：先月。前月。

こうきよ
薨去：皇族または三位以上の人の死去。



内閣総理大臣と賞勳局総裁からの上奏文の最初の部分（翻刻とは別部分）

推薦書の常として、やや持ち上げ過ぎの感が無くもないが、亡くなった当時の寺田寅彦に関する官界・学界の評価がよく分かる。やはり、寅彦は数少ないエリートだった。後世から考えると、地磁気の脈動の研究や疑似周期の発見も含めてほしかったように思う。

今ではあまり気にしないが(戦後も勲章制度は生きているし重要視する人もいる)、履歴書を見ると、位階がどんどん上がって、何回も勲章を授かっているのがよく分かる。当然ながら随筆の評価など全く入っていない。筆名を使用したのもむべなるかな、である。

文部大臣からの推薦書は文部省の用紙に書かれているが、履歴書は地震研究所の用紙が使われている。こういう場合、実務的な下書きをする人がいたと思われる。寅彦が所属していた研究所や団体の事務方でもある程度はできただろうが、多くの組織に所属していたので、逆にやりにくかったかもしれない。各事項がかなり具体的に書かれていることから考えても、やはり弟子の尽力が相当あったのだと思う。当時、地震研究所にいた宮部直巳あたりが、正月返上で頑張ったのではないだろうか。